

# 中国語教育学会会報

第15号(通巻40号) 2005年7月21日発行

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学中国語研究室内

中国語教育学会

郵便振替口座 00110-1-191152

## 目次

- (1) 「第4回全国大会」開催と報告者募集について
- (2) 「学会誌『中国語教育(第4号)』原稿募集
- (3) 「陸俊明・馬真両教授による連続講演」開催される
- (4) 2005年度「例会」の記録
- (5) 2005年高等学校中国語教育全国大会(報告)……………松山美彦
- (6) 新規会員紹介その他

### (1) 「第4回全国大会」開催と報告者募集について

本会の第4回大会は、2006年3月25日(土)に、大東文化大学(東京都板橋区)にて開催されます。研究発表を希望される会員は「題目」「発表要旨(日本語または中国語、一千字以内、FDとプリントアウトしたもの)」「連絡先(住所、電話、メールアドレス等)」を、2005年12月10日(土)必着で下記へ郵送にてお申込みください。採否については1月中にお知らせいたします。

宛先:

〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1

大東文化大学外国語学部中国語学科事務室内

「中国語教育学会第4回全国大会」準備委員会委員長 中村浩一

### (2) 「学会誌『中国語教育(第4号)』原稿募集

学会誌『中国語教育(第4号)』は来春3月の大会時までに刊行の予定です。応募原稿は400字詰め原稿用紙換算で、50枚以内。内容は中国語教育に関する研究論文や資料とし、中国語教育の現場での実践報告、調査報告や書評等も受け付けます。投稿は委嘱原稿以外、それぞれ理事複数名の査読によって採否を決定します。投稿受付締め切りは(1)と同じく2005年12月10日(土)とします。事務局宛、郵送または宅配便で送付してください。応募資格は、投稿時点における本会会員に限ります。なお、本会報4ページ掲載の「投稿規程」と「執筆要領」を参照してください。なお、編集作業の関係で投稿受付締め切りを昨年より早めておりますのでご注意ください。

宛先:

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学中国語研究室内

中国語教育学会

### (3) 「陸俊明・馬真両教授による連続講演」開催される

6月～7月にかけての約一ヶ月間、北京大学の陸俊明、馬真両教授が来日された。中国語教育学会では、下記のように関西地区、中部地区、関東地区の3箇所で（それぞれ他の団体との共催という形式で）両教授による連続講演会を開催いたしました。3地区で300名近い来聴者を迎えることができたこと、東京以外での活動が初めて行われたこと等、本学会にとっても大きな出来事であり、今後の中国語教育学会の発展の上でも大きな成果があったと思われまます。それぞれの地区で講演会の成功のために努力された会員・理事の方々に本部事務局として御礼申し上げます。なお、両教授はこれら3講演会以外にもいくつかの大学を訪問され、講演や授業を行われましたが、そのために努力された学会内外の方々にも感謝申し上げます。

#### (1) 関西地区講演会

日時：6月11日（土）

会場：関西大学 千里山校舎 岩崎記念館4F多目的ホール

テーマ：馬 真教授 “中国語教師应有的研究素质”

陸俊明教授 “汉语语法研究的走向”

来聴者：九十数名

#### (2) 中部地区講演会

日時：6月19日（日）

会場：愛知大学 車道校舎 本館K902号教室

テーマ：馬 真教授 “中国語教師应有的研究素质”

陸俊明教授 “汉语语法研究的走向”

来聴者：七十数名

#### (3) 関東地区講演会

日時：6月25日（土）

会場：東京外国語大学 研究講義棟2階226教室

テーマ：馬 真教授 “虚词研究和学习中要注意的几个问题”

陸俊明教授 “要重视讲解词语和句法格式的使用环境—兼论中国語教師应有的意识与能力”

来聴者：約百十名

### (4) 2005年度「例会」の記録

<5月例会>

日時：5月14日（土）14時～

会場：東京外国語大学研究講義棟109教室

人と題：芦澤 浩子氏（埼玉県警察勤務）「私の中国語学習歴」

滝澤 恭子氏（外務省研修所講師）「商社員から中国語教師へ—中国語教育とは？—」

<6月例会>

日時：6月11日（土）14時～

会場：文教大学越谷校舎8号館8503教室

人と題：植村麻紀子氏（埼玉県立和光国際稿等学校・非）「初級段階で扱う方向補語について」

椿 正美氏（中央大学・非）「範囲副詞“也”の作用域を推定する条件」

陶 琳氏（金沢大学・非）“中国語的道歉方略”

< 7月例会 >

日時：7月9日（土）14時～

会場：明治学院大学白金校舎 3203 教室

人と題：小川 文昭氏（明治学院大学）「文末の語気助詞についての考え方」

### （5）2005年高等学校中国語教育全国大会（報告）

2005年6月18日—19日、北海道札幌市で開催。主催：高等学校中国語教育研究会。後援：文部科学省、北海道及び札幌市教育委員会ほか。

参加者は北海道から沖縄まで100名余り。テーマは「中国語教育におけるコミュニケーション能力の向上」。1日目は公開授業（札幌国際情報高校）にもとづいたグループ討議、全体討議。2日目は北海道における中国語教育の取り組みの報告、黒龍江省齊齊哈爾市朝鮮族中学の徐先生による実践報告（「コミュニケーション能力の向上を図る日本語の授業」）。その後、日・中の先生方が熱心な討議を行った。午後は希望者が吉林大学国際交流学院、黄副教授による講演「汉语常用的社交表达方式」に参加し、また黒龍江省の教師と札幌市内観光をして交流を深めた。なお、両日とも黒龍江省からの訪日団の高校生と北海道の高校生による交流会が行われた。

当研究会は、1982年に設立され1986以降は毎年全国大会を実施している。来年は大阪府の予定。会報は第14号まで発行。事務局は国際文化フォーラム内(Tel:03-5322-5211担当：水口)。

全国8地区の支部活動への参加を歓迎します。（報告：北海道共和高等学校 松山美彦）

### （6）新規会員紹介その他

#### 新規会員氏名（敬称略）

飯田 真紀 井出 克子 岡本 俊裕 小藺 瑞恵 片桐光知子 小林 以久  
史 形 嵐 陳 振 東 松山 美彦 宮坂 健介

#### 住所不明会員（敬称略）

下記会員について住所・所属先等をご存知の方は事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

趙 慶 堯 呂 紅 梅

#### 会費納入のお願い

会費未納の方は早急に納入くださいますようお願いいたします。

#### ホームページのお知らせ

5月20日発行「中国語教育学会会報」号外でもお知らせいたしましたが、「月例会」ご案内、各種お知らせ、記録などをご覧いただけます。「入会申込書」のプリントアウトも可能です。

アドレス：<http://www.jacle.org/>、Google（日本語）で“中国語教育学会”で検索可。

#### ISSN（国際標準逐次刊行物番号）を取得

平成17年5月27日付けで学会誌「中国語教育」に「ISSN 1880-2591」が付与されました。

第4号より記載いたします。

## 《中国語教育》投稿規定

1. 投稿は委嘱原稿を除き、中国語教育学会会員の資格を有する者に限る。
2. 投稿は中国語教育・中国語学に関する論文、資料、書評その他で未公開の物とする。
3. 投稿原稿の採否は査読によって決定し、投稿者に通知する。採用の場合も、必要に応じ原稿の修正を求めることがある。(当分の間、査読は複数の理事によって行う)
4. 投稿は郵送または宅急便により、中国語教育学会事務局宛に指定の期日までに送付する。
5. 投稿はフロッピーディスクによるものとし、その内容をプリントアウトしたものを4部同封しなければならない。
6. 採否の通知その他の連絡用に住所・電話番号・電子メールアドレス等を別紙で同封する。
7. 送付されたフロッピーディスクとプリントは採否にかかわらず返却しない。
8. 原稿料は支払わない。発行後、会誌5部を無料で進呈する。なお、抜刷については、事務局の責任で各執筆者の必要とする部数を作成する。但し、経費は執筆者の負担とする。
9. 原稿の執筆にあたっては、別に定める《中国語教育》執筆要領に従うものとする。

## 《中国語教育》執筆要領

1. 原稿は日本語・中国語・英語のいずれかで執筆する。
2. 原稿はタイトル、執筆者名、執筆者の所属機関、サマリー、本文の順に記す。
3. タイトルは本文と同じ言語を使用する。日本語、中国語のタイトルには別紙にその英語訳を付す。
4. 執筆者名にはローマ字表記を併記する。
5. サマリーは本文と異なる言語を使用し、日本語、中国語の場合は400字以内、英語の場合は400語以内を基準とする。
6. 本文の字数は図版等も含め、20,000字以内(400字詰原稿用紙換算で50枚以内)とする。(原稿末尾に本文総字数を付記する)
7. 原稿はWindows上で動作するワープロまたはエディターを用い、1ファイルとして作成する。
8. 字詰は編集段階で変更することがあるので、変更後も行頭・行末等の位置が乱れないように作成する。ワープロソフトによる自動箇条書きや自動段落番号挿入機能は使用しないことが望ましい。また、原稿に図版が入る場合は図版の位置が字詰変更後も大幅にずれないように特に留意する。
9. フォントの大きさは原稿を通じて統一する。原則として外字は使用しない。
10. 中国語部分はGBコードを用いること。
11. 例文は出典を明らかにし、作例の場合はその旨を明記する。
12. 注・参考文献・例文出典一覧等はそれぞれ本文末に一括して付す。脚注は用いない。
13. 参考文献は著者名(編者名)、発行年、論文名(書名)、掲載誌名および巻号数、出版社名等を明記する。

(付記) 上記の《中国語教育》投稿規定と執筆要領は第4号原稿募集に暫定的に適用するものであり、今後さらに理事会もしくは総会の審議により変更されることがある。アンダーラインを付した部分は今回変更した部分ですからご注意ください。